

## — 翻 訳 —

# James A. Schellenberg, *Masters of Social Psychology*, Oxford Univ. Press, 1978

No.3 『研究紀要第10号, 11号』より継続

押 谷 由 夫

### Ⅲ ジョージ・H・ミードとシンボリック・インタラクショニズム

#### 静かなる反逆者

ジョージ・ハーバード・ミードは、1863年、マサチューセッツ州、サウス・ハドリーに生まれた。その地で、彼の父は組合教会の牧師をしていた。7年後、ミード家は、オハイオ州のオーバーリンに移住した。そこでもハイラム・ミード師は、オーバーリンの神学校で説教術の教師となった。ジョージ・ミードは、マサチューセッツとオハイオで育ったために、子ども時代の記録はあまり残っていないが、「注意深く、行儀正しく、優しい、かなり物静かな少年」(Miller, 1973, xii 頁)として描かれている。われわれは、彼がオーバーリン大学の学生時代、幼児期からのしつけからの開放感を味わい、とくに彼が育てられてきた神学的な考えに疑問をもつようになったのを知っている。しかし相対的に、物静かで、隠れた反逆者であり、両親とはげしく議論することもなかった。彼の父は1881年に亡くなった。母はそのころ教職につき、後ホルヨーク大学の学長として10年間勤務した。誇りと威厳をもった母と物静かな息子との間には、何の緊張もなかった。もっとも、衝突しそうな哲学上の問題についての議論をさせていたと理解されるが。その間、ジョージは知的な解放の過程を徐々におし進めていた。そして、自ら語っているように、彼が最初の20年間に教えられたことを忘れるために、後の20年間を費したのである。

彼はオーバーリン大学で、ヘンリー・キャスル (Henry Castle) と親交をもった。ヘンリーが1893年に不慮の事故で死ぬまで、最も親密な友であった。大学卒業後の4年間の空白の後——その間、ジョージは不定期的に、小学校で教師をしたり(彼は規律の問題で4か月後に解雇された)、さらに続けて鉄道の測量班として働いてもいた——ヘンリーは、ハーバード大学でもに研究しようとジョージを説きふせた。大学でミードは、ウィリアム・ジェームズ (William James) と知りあいになった。実際、ジェームズの家に住んで、子どもの家庭教師をしたのである。しかしながら、その時は、ウィリアム・ジェームズの心理学や哲学に強い印象はうけなかった。彼は、むしろジョザiah・ロイス (Josiah Royce) の講義にはるかに大きな影響を受けた。当時ロイスは、ヘーゲルの理想主義の解釈を行っていた。そこには、わくわくするような新しい哲学体系があった。ミードが後にのべているように、それは「もはや神学のしもべでもないし、形式的な論理学やピューリタン倫理の教則本」(Miller, 1973, xiv 頁より引用)でもなかった。そこには、理想の自由な流れを感じさせるものがあった。人間経験の本質に關す

る無限のひろがりをもつ問題にも門戸が開かれていた。

ハーバード大学で1年すごした後、ジョージ・ミードは、ドイツのライプチヒでヘンリー・キャッスルといっしょになった。そこで彼は、ヘンリーの姉ヘレン(Helen)に熱をあげ、求婚した。ジョージ・ミードとヘレンは、ちょうどアメリカに帰る前の1891年に結婚した。それまでにジョージは、ベルリン大学で、生理学的心理学を中心に研究を行っていた。彼の友ヘンリーは次のように指摘する。これは同時に、ミードがアメリカへ帰った時には宗教論争をさけたいという願望が基本にあることを強く物語っている、と。キャッスルは、「ミードは、自分独自の最も本質にかかわる哲学的意見をのべる機会を得るのは困難だと考えている」と記している。他方、生理学的心理学に彼は「無害な領域」(Miller. xvii頁より引用)を見出した。しかしながら、1891年、ミシガン大学の哲学部で教べんをとるため、アメリカに帰らないかと勧誘されたとき、ミードは即座に受諾した。彼はベルリン大学で取得しようとした博士号を得ないまま、夫婦そろってミシガン州のアン・アーバーの新居にひっこした。

まさにミシガン大学において、ミード哲学の一般的なわく組みが姿をあらわしはじめたのである。とくに、その環境が助けとなったようだ。何よりも、ごく最近任命された学部長、ジョン・デューイ(John Dewey)がいたことである。デューイは、ミード同様、束縛を解放する力としてヘーゲルの理想主義を研究したことがあった。しかし両者とも、そのときは、哲学のむしろ科学的な基礎に関する研究を行っていた。彼らはその基礎として、より生物学に重点をおいたものより社会に重点をおいたものの両方の必要性を認めていた。さらに二人は、ウィリアム・ジェームスの著作の中に(彼の『心理学原理』がちょうど出版されたときだった)、精神科学の重要な新しい手がかりを感じとった。しかし、ミードもデューイも、まだ哲学あるいは心理学に対する自らの立場をはっきりとはうたてていなかった。

また、ミシガン大学にはチャールズ・クーリー(Charles Cooley)という若者がいた。彼は当時、経済学の博士号をめざして研究していた。クーリーは、アダム・スミスが展開した、社会の中で効率的に行為するには他人の立場に自らをおかねばならないのはなぜか、に関する考えに強烈な印象をうけた。この「共感的想像(Sympathetic imagination)」の重要性は、後にクーリーが、『人間性と社会秩序』の中で「鏡にうつった自己」(Looking glass self)の理念として発展させた。クーリーによれば、自我は他者の評価を反映するかたちで発達する——これは、ミードが役割取得の概念にとり入れた考え方である。事実ミードは、精神の起源について疑問を投げかけることによって——クーリーは所与のものと仮定していた——、クーリーよりもより一層その考え方をおし進めた。

デューイ、ミード、クーリーが、ミシガン大学で3年間、相互に接触する中で、社会心理学に対する3人の共通の志向性が、主要な因子をつくっていたのである。この共通の志向性は、後に「シンボリック・インタラクショニズム」とよばれるようになった。そしてミードは——デューイの一般的な名声にもかかわらず——その最も権威ある代弁者となったのである。もっとも、その時は原理的なものはまだ形づくられていなかったし、語られてもいなかった。ジョージ・H・ミードは、ちょうど哲学者として自分の仕事をはじめようとしているときだった。彼は基本的実在物——魂や精神のような——を当然のことと考えない科学的基盤の上に、自分の哲学をつくり出そうと決心した。これが正確にどの方向にむかっていくかは、まだはっきり

していなかった。

## シカゴ哲学者

ウィリアム・レーニー・ハーパー (William Rainey Harper) がシカゴ大学を創設する際、3つの学部——古典、セミ学それに哲学に、特に力を与えるべく構想を練った。ジェームズ・ヘードン・タフツ (James Hayden Tufts)——哲学者であり、ハーパーの大学創設活動に加わっていた——は、ジョン・デューイを哲学部の部長にするよう提案した。デューイは、その職を申し込まれたとき、ミシガン大学から、自分とともにもう一人若い哲学者を連れてくるのを条件に同意した。こうしてG・H・ミードが哲学部の助教授として、1894年シカゴ大学に赴任したのである。

デューイのリーダーシップのもと、その新しい学派はすぐにプラグマティズムとよばれる哲学運動の中心と認められるようになった。タフツ、デューイそれにミードはそろって、観念 (idea) の意味を、実践的結果によって確認していこうとする哲学の方法を主唱した。10年後に、デューイはコロンビア大学へ移るため去っていったが、ミードはその後もずっとシカゴ大学に残った。1931年に68歳で死亡したとき、彼はまだシカゴ大学の哲学部教授であった。ミードがシカゴ大学で教べんをとった約40年間、アメリカプラグマティズムの中心として君臨した。ジョン・デューイは、シカゴ大学を去って後も、長年グループの知的リーダーであった。しかし、これは単なるデューイ門下の学派ではなかった。一般的な志向性は共通にもっていたが、各人はそれぞれ固有の領域に特別な関心をもっていた。エドワード・スクリブナー・エームズ (Edward Scribner Ames) は、ジェームズ・ヘードン・タフツが倫理学や美学に興味をもっていたのと同様、宗教に特別な興味をもっていた。アディソン・ムーア (Addison Moore) はとくに論理学と認識論に関心を焦っていた。G・H・ミードはとくに社会心理学に注意をむけていた。そしてジョン・デューイは、あらゆることに興味をもっていたように思えるが、心理学と教育にとくに積極的であった。彼は教育のシカゴ学派の基礎を築き、また心理学によって哲学部を統轄したのである。

このシカゴ学派の哲学の中心は、過程に重点をおくことだった。というのは、進行している活動の一部として観念をみていたからである。生活はすべて活動を含んでいる。それは自然におこる活動であり、調整や再調整の進行過程を通してあらわれたり、変化したりする目標によって組織化される活動である。一般的に言えば、これがシカゴ大学から発したプラグマティックな哲学のエッセンスである。

ジョン・デューイは、1904年にシカゴ大学を去ったが、彼とジョージ・ミードは生涯を通して親密な友であった。ミードは——シカゴ大学に残りながら——ついには哲学部の部長になった。もっとも彼もまた、死ぬ少し前、コロンビア大学からの申し込みをうけ入れていたのだが、ミードは、一般的にはデューイのリーダーシップを認めていた。デューイの考えを大ぴらに批判することは決してなかった。デューイの膨大な著作について、彼が個人的に示した制限事項はまったく微々たるものだった。晩年ある場面で、デューイが『確実性の問題』で書いたことを本当に信じるかとたずねられたとき、彼のこたえは「全部」だった。一方、デューイは社会心理学におけるミードの特別な影響を自覚していた。ミードの考えは、「私自身の思考に変

革をもたらした。もっとも私は、それを十分理解するには時間を要したが」(Dewey, 1931, 313頁)とのべている。

ミードは、デューイの1896年の論文「社会心理学における反射弓概念」にとくに影響を与えたと思われる。この論文は、心理学のいわゆる「機能」学派の基本的な考えをまとめている。また後の行動主義運動のほとんどにあてはまる本質的な批判をも示したのである。デューイは、刺激と反応の概念を、—— そのころ生理学から心理学にもちこまれた——有機体が行為している過程での人為的な特徴であるとして批判した。この進行中の行為における重要な特徴は、知覚や注意や行為といった特殊な部分ではなく、全体としての活動が組織化されたり、個人の適応活動の中に再構成される方法にある。弁別過程に関する一貫性のない心理学のかわりに、デューイはより統合された概念を主張した。そうすると、知覚刺激は、定義や調整を必要とする活動の局面となる。それは、今までうけ入れてきた様々な定義とは一部異なる。同じような状況では調整された活動を完成させるものすべてが運動的反応となる。そしてまた、これは行為を方向づける定義や目的に従って変化する。進行中の活動に関するこれらのより大きな機能は、知覚活動や運動活動が正しく理解されるようになるとき認識されるに違いない。

ミード自身は、1900年ごろまでは哲学や心理学における著名な論文を発表していない。生涯を通じて、彼は約25編の主要論文を書いたにすぎない。彼の本はすべて死後出版されたもので、彼の学生によって講義ノートを大部分つなぎあわせたものである。彼の最も完全な原稿は、一連の講義であり、それは『現代の哲学』として出版された。彼の社会心理学講義は『精神・自我・社会』(1934)の基礎を築いた。他の講義は、『19世紀の思想運動』(1936)、『行為の哲学』(1938)にもられている。

ミードが強い影響を与えたのは、少くとも彼の生前においては、出版界を通してではなく、むしろ教室においてであった。なお彼の講義は、それほど感動的なものではなかった。彼はめったに学生をみななかった。彼はほとんど表情を変えずに話した。天井や窓の外を見ながら、彼は座わり、静かにその日の主題について講義した。

教室でのこのかなりよそよそしいスタイルにもかかわらず、ミードは学生に大きな影響を与えた。それは彼がアメリカで生まれた社会科学の意向——精神における独創性、方法における科学性、適用における改良主義——によく適合した哲学を講義したためである。シカゴ大学は20世紀前半にアメリカで活躍した多くの社会科学者の訓練機関であった。G・H・ミードの講義は、そういう多くの人々の教育において、特別に重要な位置を占めていた。

ミードと形式ばらずに接触したものは、彼を先生として知っているものがうけるよりもより印象づけられることがしばしばあった。彼は背が高く、200ポンドのハンサムな男で、生涯健康であった。彼の興味は広範囲に及び、哲学や社会科学のみではなく、自然科学や音楽、美術、文学などが含まれる。彼は、シェークスピアやワーズワース、キーツの作品の長々と続く部分同様、ジョン・ミルトンの作品を2時間近くも暗唱できたと報告されている。ミードの多方興味は、座談家としての彼にうまく役立っていた。彼の仲間のタフツは、彼を「私の知る最も興味をそそる座談家」(ミラー、1973, xxxv頁より引用)とよんだ。彼を教室外でみた学生もまた、彼を印象的に思うのが常であった。たとえば、1800年ごろシカゴ大学にいた大学院生が次のように報告している。

私はミードのコースとセミナーをとった。私は教室では彼を理解しなかった。しかし数年後、ミードは私の動物実験に強い興味をもち、多くの日曜日、彼と私は、私のラットと猿を観察するために、実験室ですごした。これらの仲間意識の発揮や気さくな様子を見て、私は彼を理解したのである。彼のようなやさしくて立派な人にはあったことがない（Watson, 1936, 274頁）

この学生がアメリカ行動主義の主導的な代弁者となったJ・B・ワトソン(John B. Watson)である。

### ミードの社会的行動主義

ミードの教室での講義ノートをもとめた『精神、自我、社会』の中で、チャールス・モリスは、ミードがむしろ偶然に使ったことばをとりあげた。「社会的行動主義」は、ミード思想の社会的基盤と自然主義的基盤の両方を強調するために用いたモリスのことばである。この特性づけは、だいたいにおいて適切であるが、我々は行動主義のミード的形態と、ミードの晩年心理学界で一般的になったもの（とくにJ・B・ワトソンと結びついたもの）と明確に区別しなくてはならない。ワトソンの行動主義は、行動研究に「精神」あるいは精神的な概念をもちこまない。ワトソン派の行動主義者によると、もし心理学が科学的であろうとするならば、外的に観察されない概念はすべて捨てることが必要である（そうせねばならない）。ワトソンとミードは、ワトソンがシカゴ大学の心理学実験室で働いていたとき、個人的な親交をもっていたけれども、ミード流の行動主義は、ワトソンのものとはかなりかけ離れている。ミードにとっては、精神は心理学的探求の中心的関心事であり、客観的測定が困難だからといって排除されるべきものではない。しかし、精神的なできごとは、行動主義的文脈によって明らかにされるべきであり、この意味において、ミードの社会心理学は「行動主義的」と考えられるかもしれない。ミードはいつている。

「社会心理学は、観察可能な活動をもって研究をはじめるといふ意味において行動主義的である——力動的で進行的な社会過程や科学的に研究され分析されるべき構成要素をもつ社会的行為など——。しかし、個人の内的経験——この過程の内的局面——を無視するという意味での行動主義ではない。」（Mead, 1934, 7頁）

ワトソンとミードが、共通に考えていたのは、心理学研究をはじめるとあたり、他と関係せず存在する精神よりも、むしろ事象の行動主義的文脈をとりあげようと決断したことである。

行動主義と一般的に結びつけられる大きな特徴の1つ、つまり、ある現象を行動の最も単純な単位に還元しようとする傾向を、ミードはとくに拒絶した。逆にミードはいう。「個人の行動は、彼が成員である全体的な社会集団の行動によってのみ理解される」（Mead, 1934, 6頁）。というのは、このような大きな集団こそが、個人の行為に内容を与えるからである。ミードの方法は、一般により広い社会的勢力から個人行動のより小さな事象までを連続して研究するというものである。そうすることで、彼は——デューイが関係した「機能主義」と非常によく似た——行動の原初的単位に注意を限定するのを拒む心理学をつくりあげたのである。社会的行為は、全体的過程として理解されるべきであって、特定の刺激と反応の寄せ集めとして理解されるべきではない。ミードはこの点を次のようにのべている。

「社会的行為は、刺激と反応からなりたつもの、というふうには説明されない。それは、力動的全体として

すなわち、進行中のものであって、どの部分をとってもそれだけでは理解できないものとして、つまり、その中に含まれる各人の刺激と反応によって意味される複雑な有機過程として、とらえられねばならない」(Mead, 1934, 7頁)

精神活動に関するミードの概念は——「精神」の理論——、社会的身ぶりの理解にもとづいている。身ぶりの分析において、彼は、チャールズ・ダーウィン(Charles Darwin)やウィルヘルム・ヴント(Wilhelm Wundt)の著作からとくに示唆をうけた。

ダーウィニズムは、精神は生物学的適応の過程を通してあらわれるものだ、とするミードの主張の一般的な背景となっている。とくに、彼はダーウィンの『人間と動物における感情の表出』を読んで、人間の言語の分析の出発点は、動物の身ぶりを考えるのが基本だと考えた。ダーウィンは、ある動物の最初の行為が、それに続く他の動物の反応に修正をひき出させる事実注目した。たとえば犬のけんかで、それぞれの犬の行為は、お互いの反応を修正するための刺激となる。ダーウィンは、内的感情の表出の中に価値が含まれるために、それらの身ぶりに興味をもった。ミードは、社会的身ぶりに関してダーウィンが考えた仮説に疑問をもった。しかし彼はダーウィンが注目した行為の重要性に強く印象づけられた。

ヴントは、——ミードに従えば——ダーウィンよりもより明確に動物の社会的身ぶりの重要性を理解していた。彼は、社会的身ぶりは、外的な実在を反射させるのと同じようには内的感情を表出しないと考えた。社会的身ぶりは、個々人がお互いの行為に反応する複雑な行為の1部である。この考えは、社会的身ぶりを個人の感情の表出としてよりむしろ、社会的相互作用の1部として理解する方向へ導く。社会的行為には2人以上の個人が含まれる。かつ彼らの行為は、自らと相互に同時に影響を与える。身ぶりは「他者の反応による適応を生む行為の局面」(Mead, 1934, 45頁)である。ミードはいつている。ヴントはいかに、そういった身ぶりが自己意識の出発点として役立つかを明らかにした、と。この提言に従ったことが、社会心理学に与えたミードの最も大きな貢献となった。

人間行動を、動物の身ぶりの一般的な調査からアプローチするとき、我々は十分には実行されない相当量の行動に気づく。ある行為ははじめられるだろうが、その達成は、下等動物に観察されるよりもより大きな因習や有意的な統制によって制限されるであろう。行為が開始されるとき示される身ぶりは、しかしながら、たとえそれが達成されなくとも、完全な行為の意味のいくらかを理解させるであろう。意味は、予期された結果から出てくるのであり、あとで実際におこるかもしれないものからではない。「本を取ったり読んだり、溝をとびこえたり石を投げつけたりするためのレディネスの感情とは、本や溝や石の意味の意識が生じる能力のことである」(Mead, 1910, 399頁)。そういう継続する行為に関する予測は、社会的行為にあてはめるとき、後に行為として十分には実現されないものすべてに対して意味をもたらすかもしれない。しかし、予測それ自体は重要なことからである。それは、完全な行為に結びつけられるものの身ぶりを通して(いわゆる行為の初期の部分を通して)、創造性をもたらす。これがだんだんと明確になるとき、我々は自己意識をもつことになる。

ある身ぶりは、社会的行為に関係するすべての人々に同じことから表示するために重要である。これらは、他の行為に伴う場合よりも短くされているために(より単純な身ぶりがより十分な意味をもたらす)、とくに敏感である。これは、個人が自分自身を他者の立場に、かな

り容易におきかえたり、意味する行為の達成を知覚させたりする。ミードによれば、声の伴う身ぶりは、とくに重要な例である。「声を伴う身ぶりは、特異な重要性をもっている。それは、他の人が反応したのとまったく同じ様式で、それを行った個人に反応するからである」(Mead 1922, 160頁)。そういう身ぶりは、だんだんと短い形で多くの分有された意味を伝えることができる。かつ、それらは単にこの意味の運び家として、短縮された形で使われる場合が多くなる。それらは、ミードが「意味あるシンボル」と呼んだものになる。身ぶりは、他者の明確な反応にマッチする暗黙の反応が作り手の中におこるとき、意味あるシンボルとなる。ミードはいつている。「個人の意識は自分自身の身ぶりに対する他者の態度をこのように取得することによっている」(Mead, 1934, 47頁)。そういう意味あるシンボルは、人間の言語の基礎となる。それらはまた、人間的思考の素材となる。ミードに従えば、精神や知性は、身ぶりのこの内面化された会話を通してのみ可能となるからである。

意味あるシンボルによってもたらされた意味は、本質的に常に社会的である。シンボルは、「経験やそれが起こる行動の社会過程の重要性を常に仮定している」(Mead, 1934, 89頁)からである。この「社会過程」は、主として人間集団、すなわち、ともに行為を続けこの行為を実行するために共通の意味あるシンボルを共有するようになる集団、の問題である。

ミードに従えば、自我性 (Selfhood) は、意味あるシンボルが「精神」の発達の原因になるのと同じ状況から育っていく——両者とも社会的行為から意味あるシンボルがあらわれてくる——。自我は自分自身に対して社会的客体となる個人である。自分自身に対して社会的客体であることは、自分のまわりの人々によって考えられる意味と同じものを、自分の身ぶりの意味としていることを意味している。

他者の役割を取得するという個人のこの能力から、個々人は、自分自身に対してミードのいわゆる「一般化された他者」を発達させる。一般化された他者は、ある集団に共通した一連の組織化された態度であり、自分自身の行動の背景として各人が身につけるものである。それは単に、特定の他者の役割を取得することで十分というわけではない。個々人はまた、集合的全体の態度をも、身につけねばならない。これは、行動において有機体が意識を発達させるうえで本質的なことである。「人が属している組織化された社会的集団の態度を取得するかぎりにおいてのみ、彼は完全な自我を発達させることができる」(Mead, 1934, 155頁)からである。そして、社会に対するこのような見方からすると、人間有機体の複雑な形態は、他者の一般化された態度を取得するのに必要な個々人の能力によってのみ、生じることになる。

他者の態度を組織化する能力は一度にすべてが発達するのではない。その創出には2つの主要な発達段階を確認することができる。第一段階では、「個人の自我は、彼が参加している特定の社会的行為に他の個人が、彼に対してやお互いに対して特殊な態度を組織化することだけで形成される」(1934, 158頁)。この段階はしばしば「遊び」の段階とよばれ、対人的なギブ・アンド・テイクを示唆している。対照的に、他者の態度が整合的な一般化された他者に同化されるときが、「ゲーム」の段階である。それゆえ、「社会的・集団的態度は、個人の直接経験の領域内にもちこまれ、彼の自我の構造ないし組織の要素として含まれる」(158頁)。一般化された他者の概念や、それがいかに自我発達の第2段階で機能するかを例証するために、ミードは野球チームをとりあげる。個々人は、ゲームのルールの中に含まれる他者の期待

と自分のチームの目標についての全体構造を取得することのみゲームの中に入っていきける。

「ゲームには論理がある。だから自我のそういう組織化も可能となる。獲得すべき明確な目標がある。様々な個人の行為もこの目標との関連で互いにすべて関係づけられているために、彼らには争いはおこらない……彼らは単一の有機的な流儀で相互に関連している」(1934, 158-59頁)

そういった組織化された期待の結合から、システムティックなパーソナリティ組織が創出する。ミードのこたばを続けると

「ゲームは、だから組織化されたパーソナリティが生じる状況を説明してくれる。子どもが他者の態度を採用し、かつその他者の態度によって共通の目標との関連で自分がしようとすることを決定できるようになったときはじめて、彼は社会の有機的な構成員になっている」(159頁)

十分に発達した後も、自我は決して静的ではない。それはつねに、個人の集団内での経験が変化する範囲で変化している。しかし、ミードが自我の2つの局面として“Me”と“I”の区別を明確にしたように、これは自我性における基礎のみが変化しているのではない。“Me”は、自我の慣例的かつ習慣的な組織体である。それは、自分自身の行動の道案内として組織化された個人の態度からなる。我々は我々自身の自己意識を形成しようと、他者の態度を組み入れるために、“Me”は我々が我々自身の行動を反省するとき意識する客体としての自我でもある。

しかし、もし自我性が、“Me”の中にのみ存在するならば、我々の自我は社会の単なる代理人にすぎなくなる。人間のみのできる機能は、他者の期待を考えることである。しかし、そういった“Me”は我々自身の行動において最もよく気づくものであるとしても、これよりもより重要な部分が自我にあるとミードは主張する。これをさらにミードは“I”とよび、自我の積極的で衝動的な側面として言及している。自我(“Me”の側面の)に関するイメージに反応するとき、我々が行うのは、このイメージのように明確でない。何か新しいものが、反応と行為の間につくられるのであり、行為におけるこの何か新しいものがミードの“I”である。“I”はそれゆえ、自我の変革的、創造的側面であり、行為において創出する行動の新しい形態をもたらす。行為は、単に過去によって決定されるのではない。また、我々が行為をはじめるとき考える自己意識の見取図によって、完全にセットされるものでもない。自我の活動的な部分である“I”は、一般に、しかし決して完全にというわけではないが、“Me”の反省的自己意識によって想像されるみちすじにおいて、行為をおし進めるのである。

### 行為における精神

ミードを論ずるに際し我々は、進行中の行為の問題を強調してきた。これは、ミードの行動主義的側面をのべているのである——すなわち、彼は、精神の内的な性質についてよりもむしろ、進行中の社会的行動について重要性を指摘した。ミードによれば、社会的行為は、社会心理学的分析特有の単位であった。しかしながら、1つの行為は、顕在的側面同様、潜在的側面をも含んでいるとみるべきである。だから、行動主義者ということばが、顕在的な行動にのみ注意をむけることを意味するなら、ミードは行動主義者とはいえないのである。

行為は——ミードの分析では——一般に4つの局面をもっている。それらは「衝動」「知覚的局面」「操作」「成就」ということになる。衝動は動作の中に行為をセットする。知覚的局面



は、それに方向を与える。操作的局面は、実行へと導く。成就是、行為によってもたらされる最終的な経験である。人間にとって、操作的局面がとくに重要である。というのは、これは我々が実際に現実と接触するところだからである。ここでミードは、明確な人間性の発達において、人間の手が特に重要な役割りを果たすことを知った。手とそのすばらしい柔軟性によってこそ、我々が目的を達成するのに使い得る様々な手段を学習するのである。そして、様々の実行可能な手段についてのこの意識が、人間の自己-反省的性格に大きく加えられる。一般に下等動物は、行為の知覚的段階と成就段階の区別がほとんどない。しかしながら

「人間の手での接触は、行為の初めと終わりをとりなし、何かをするとき、様々な方法を用意し、さらに障害や妨害があるとき、行為の達成において自ら表明する選択可能な衝動をひきおこす。人間の手は、固定した生得的行動傾向をうちやぶるのに大きく貢献する」( Mead, 1934, 363頁)

行為は、個人の行動の単位として分析されうるが、人間行為の内容は、本質的には、社会的内容である。それは、1人以上の個人を含む状況においておこるという意味のみで社会的だというのではなく、他者の反省的判断が、行為のはじまりや実行において組み立てられるというかなり広い意味において社会的なのである。我々の行為が社会的になるには、まわりに他の人々がいることだけではない。はるかに重要なのは、我々の内に存在する人々である。

他者は、シンボリックな記号を通して、我々の内に存在する。自己-意識や人間の内省的行為を可能にする意味あるシンボルは、また人間コミュニティのための言語因子をもたらす。言語を通してこそ、人間として、我々は十分な内省的知性を所持できるのである。そして、その言語は——広くは文化の発達という意味で人類と、また狭くはライフサイクルという意味で個人、の双方のために——他の人々との身ぶり会話を通して創出する。それゆえ、意味あるシンボルの使用と発達を通して、——最初は、他者といっしょに、それから後にのみ、我々自身の内での思考を通して——我々は、特徴ある存在となるのである。これは、人間行為の社会的、象徴的性質のうち一番重要なことであり、このために、社会心理学のわく組みにおいて、「シンボリック・インタラクショナリズム」という一般的な名称をつけられているのである。しかし、それは人間性に関するかなり一般的な哲学でもある。

個人の精神と社会の間の緊密な連関ゆえに、ミードは、個人の行為に対してと同様、社会的行為に対しても同様のプラグマティズム哲学を適応させようとしたのである。個人の行為は、社会的想像、すなわち、おこりそうなことについて社会的に基礎づけられた概念、によって導かされる、とみなされる。同様に社会における行為は、何がおこりうるのかに関する想像的な予見によって導かれる。

ミード自身、シカゴとイリノイにおいて社会改革研究会で活躍した。親密な友にジェーン・アダムズ ( Jane Addams ) がいた。彼は、一般にはセツルメント・ハウス運動に、特にシカゴハルハウスにかかわっていた。彼はまた、これからの公教育や今後の組織化された労働の役割についての様々な運動に積極的にかかわっていた。彼は、行為の中でそれ自身を表出しようとする社会的に基礎づけられた精神にとって、社会改革は当然のことだと考えた。「それは可能であるべきだ」、これは社会問題について父と話したうちで最も特徴的なものとして、ミードの息子が覚えていたことばである。( Dewey, 1931, 312頁)。そして、この可能性の認識とともに、彼は、いかにすればそれが達成されるかを考えたとのべている。それらは、常に

変化し——しかし、そこでは人間の価値が知的に構成されていなければならない——常に再構成されている世界に適応されるミードのプラグマティズム哲学にとって当然のことばである。ミードはこの哲学を『行為の哲学』の中で次のようにのべている。

我々はだれもが、ある意味で我々の属している社会秩序を変えようとしている。我々が生活することそのことがそれを行っているのである。そして我々が生きることは我々自身が変化することである。社会の中では常に反応にこたえることで、行為が存在する。たえまなき再構成のこの過程が価値の過程である。私が知ることのできる唯一の本質的命令は、この本質的社会過程を存続させることである。それはすべての人々の幸福が、個人の幸福よりより価値があるために存続しなくてはならない、というよりむしろ、我々が存在し続けるために、我々は社会的存在であらねばならないのである。社会は、個人が本質的に社会的であるのとまったく同様に本質的に個人的でなければならない (Mead, 1938, 460-61 頁)

## 連続性

ジョン・デューイは、ミードについて次のように語っている。「私は私がかって知っているどんな人よりも、彼の独創的な性質と彼が獲得し学習したものはすぐれている、と考えている。彼の哲学において行為と内省と感情間の区別は存在しない。というのは、彼自身の中に区別がないからである」(Dewey, 1931, 310, 313 頁)。パーソナリティのそういった連続性、とくに思考と行為の連続性は、ほとんどの哲学者におけるよりも、G・H・ミードにおいて明らかにより自然なものとなった。そして、この連続性は、またミード哲学の中心テーマとして印されている。それは時間外行為の連続性、行為における事実と価値の連続性、それに個人と社会の間の連続性を含んでいる。

ミードによれば、現実とは、つねに現在に焦点づけられる。しかし、現在は過去の認識と未来の準備の2つを含む。人間の行為はそれゆえ、つねにこれらの時間のカテゴリーの橋渡しをし、進行中の現在に停泊する。

さらに、ミードのプラグマティズム哲学においても、事実と価値の間に連続性があった。それは、客観的現実——人間の目的とはかけはなれた——と、人間の目的の現実に含まれるものとし意的に区別する。前者(「客観的現実」)は、もしそれが、知覚を促進する人間価値に関係しないならば、本当には理解できない。後者(「価値」)はある意味を導くためのある種の物理的現実を要求する。

時間外行為の連続性や事実と価値の連続性は、ミード哲学の中心テーマであった。しかし、ミードの社会心理学においてとりわけ中心となった連続性は、個人と社会の連続性である。個人の自我は、それが現われるには、社会が必要である。そしてそれは社会的相互作用の能力から創り出されるのである。社会は、また——自己-意識精神以前に、独自に発達するけれども——人間的な形態において個々人の意識的参加を要求する。

個人と社会の間のこの連続性が、社会に対して、根本的な因果上の優先権を認める立場で——社会心理学におけるミードの名を、社会心理学者の間で、特に有名にしている。シカゴ大学での最後の10年間における社会学部——当時、アメリカ社会学会の第1のセンターであった——でのミードの影響は、この学部をときどき「G・H・ミードの開拓地」(Rucker, 1969, 22 頁)と呼ばせたほどである。W・I・タマス(W. I. Thomas)、ロバート・パーク(Ro-

bert Park), アーネスト・W・バーヂェス (Ernest W. Burgess), エルスワース・ファリス (Ellsworth Faris) やロイス・ワーズ (Louis Wirth) といった人々は (すべてアメリカ社会学のリーダーで、全員がこの時期シカゴ大学にいた), とくにミードに対して恩義を認めていた。たとえば、ファリスは — 1925年に社会学部の学部長になった — 上級の社会学部全学生に、ミードの社会心理学コースをとるようすすめていたし、彼らのほとんどのものが、それに従った。

徐々に、ミードの影響は、シカゴ大学以外にも及び、シンボリック・インタラクショニズムは、社会学的な訓練を受けた社会心理学者のほとんどのものにとって、支配的な理論的テーマとなった。オーソドックスなミード学派を明確に定義することはできない。それが他の解釈とまざりあわされたとき、シンボリック・インタラクショニズムが、どこに拡大していったかをはっきりと確認することは、一般には不可能だからである。にもかかわらず、多くの社会学者の社会心理学的研究の主要な経路と、G・H・ミードの残影に特に影響された研究領域との双方に意味をもつ研究に対し、様々に重なりあう経路をあげることは可能である。これらの領域には、役割理論、準拠集団論、職業的社会化の研究、社会的逸脱におけるラベリング理論、社会的相互作用におけるドラマツルギカルなアプローチ、それに民族社会学的方法論がある。

たいていの役割理論は、その中心概念として役割期待を使用する。人の役割に一致する他者の期待パターンが存在する。多くは、これをいかに知覚するかによって自分自身の行動が決定する。ある役割理論家は、集団と組織に焦点をあて、様々な役割のパターンがいかに発達するかを研究した。またある者は、個人の行動に焦点をあて、異なった期待間の葛藤がいかに解決されるかに、とくに興味をもつことが多い。

個人に及ぼす集団の影響を研究する多くの人々は、ミードと同様、個人が集団を理解する方法の重要性を強調する。このことは、物理的に存在しない集団が、— おそらく個々人が自分の状況と比較する人々に関する単純なカテゴリーさえも — 行動に重要な影響をもつかもしいないという考え方を導く。人々が行動するとき準拠する集団に同一化することや、そういった集団が彼の態度や行動に影響を与える方法を研究することは、準拠集団理論の第1の関心事である (あるいは、それがしばしば社会的比較理論とよばれることから理解できる)。

ジョージ・H・ミードの伝統をくむ自我理論は自我の社会的文脈を強調する。他者の反省的判断が自己-評価のパターンの中にいかに組織化されるのか、という問題は、関心をむけている中心的なものである。自己-概念の経験的研究は、つねに、これらが特定の意味ある他者との関係の中に根づく方法についての研究を含んでいる。

職業的社会化の研究は、しばしば、自我理論や準拠集団理論を、特定の形をもった社会的文脈に適用させる。エベレット・ヒューズ (Everett Hughes) と彼の研究グループは、様々な職業の研究をするのに、このアプローチにとくに積極的であった。ここでは、個人は、自らの行動が職業的地位に適合するように新しい意味づけを徐々に獲得していくとみなされる。そして、人々が他者との相互作用を通して、どのようにこれらを学習していくかが中心的関心事となる。

逸脱の研究は、最近、相互作用論者のパースペクティブを適用する主導的研究領域となった。社会がある行為を逸脱とラベルづける方法が逸脱の第1状況とみなされる。個人が他者の判

断に、どのように反応するかが——ときどき、自分自身が、彼らのラベルづけをうけ入れることも含まれる——、逸脱行動を理解しようとするこの「ラベリング」アプローチにおけるもう1つの主要な関心事である。社会的相互作用に対するドラマツルギカルアプローチは、劇場としての世の中のイメージを強調する。この観点では、人々はつねに自らの聴衆に向かって行為することになる。つまり、人々の「遂行」が、予期される聴衆の反作用によっていかに形成されるのか、という点がこのアプローチの主要なテーマとなる。アービング・ゴフマン（Erving Goffman）は、このアプローチを広範囲に及ぶ様々な社会的状況に適用させる社会学者のうち、とくに著名な人物である。

民族社会学的方法論は——ハーロルド・ガーフィンケル（Harold Garfinkel）と研究仲間によって開発されたように——行為者の準拠わくから日々の社会的行為を研究するアプローチである。個々の行為者の観点を強調することは、しかしながら、すべての分析を社会的行為者の意識的レベルに限定させねばならない、というのではない。むしろこれは、多くの意識的内省なしにつねにもちこまれる社会的行為について、それらの根源的基礎を検証することを出発点にしているのである。民族社会学的方法論者は、関係する個々人がこれらの意味に気づかない時でさえ、そういった行為の社会的意味づけを明らかにしようとする。ミードと同様、民族社会学的方法論者は進行している社会的相互作用に根づいた行為の意味を調べるのである。

ミードは、フロイトとちがって、はっきりと限定された弟子による学派を残さなかったために、シンボリック・インタラクショニズムの伝統に従う人々の間に多くの未解決の問題がある。これらの1つは、社会心理学における現象学的研究の基本的性格でもある。もう1つの問題は、社会的起因論の性格と関連する。これは、人間の行動は先行する起因の枠組み内で行われるとみなせるかどうか、にかかわる。第3の問題は、シンボリック・インタラクショニズムの理論の検証可能性に関連する。シンボリック・インタラクショニズムは、検証可能な仮説をつくることができるのか。G・H・ミードの研究から続いている様々な今日の社会心理学を理解するために、これら3つの問題のそれぞれを簡単に検証してみよう。

社会心理学の現象学に関する性質とは何か。ミードと同様に我々は「社会過程の中に横たわるものとして個々人の行動」（Mead, 1934, 6頁）を研究すべきだと主張するのではあまり大きな助けとはならない。それは我々がより広い文脈の中で個々人の行為を研究すべきことを認めているが、この文脈を把握するための確実な手掛りを与えはしない。ある社会心理学者は、これらの手がかりを用意するために、役割理論を使用し、進行中の社会的相互作用の型を理解するキイ概念として、役割期待を研究しようとする。また他のものは、新しい状況に適應するために常に再構成される自己一定義に強調点をおく。さらにあるものは、十分な社会的状況の中で進行する行為に関心が向けられねばならないと主張する——この進行中の行為が、いかに観察され、概念化されるべきかが、あまり明確でないことがしばしばある。

社会的心理学が科学であらねばならないという限りでの、我々の基本的な問題は、何が観察されるのか、経験的研究を焦点化するための中心構造は何か、というものである。ミード自身この問題に対し、あまり助けになるものを与えていない。彼は科学者というよりむしろ哲学者であった。彼の一般的な強調点は、過程であって、構造にはない。では、社会的過程の本質を

とらえるための最もよい用具は何か。ここには、シンボリック・インタラクショニストの合意をえるような明白な答えは存在しない。たとえば、アーヴィング・ゴフマンのような人々は、簡単に行動の流れを観察し、構造化された社会的状況の性質や、行動に付与される操作的定義について、注意深い注釈を行っている。マンフォード・クーン (Manford Kuhn) のような人々は、自由な立場で報告された自己-概念に対し特別な注意を払った。また、ある者は——特定の意味でシンボリック・インタラクショニストといえる人々——、言語パターンを注意深く観察する。若干のシンボリック・インタラクショニストは、社会的経験と自己-概念の重要な関係をとらえようとする実験室実験を計画する。しかし、そういった人為的な枠組みにおいて、進行中の相互作用の本質の意味をとらえうるかについては、おおむね、懐疑的である。

現象の本質に関する問題は、直接に、因果解釈の問題を導く。たいていの科学は、先行する事象が、それに続く事象に与える適切な因果的影響を整理することを基本にしている。しかし、これは人間の社会行動を正しく評価しているだろうか。人間行動は、先行する原因によって決定されると理解されうるだろうか。もし、人々が自らの行為を構成する解釈過程を強調するならば、行動の原因として先行の事象を認めることは誤りだ、といえるかもしれない。これらは特定の方法で解釈されるという理由でのみ影響力をもつ。そしてそれらは、行為が方向づけられる目的に従って、特定の方法で理解される。そういった考えは、人間行動の適応に対して正しいと評価される決定論的モデルが存在するのか、という疑問をもたらす。この問題に関してシンボリック・インタラクショニズムはいくらか見解がわかる。一方ではハーバート・ブルマーを主導者とする非決定論者が存在する。彼らは、目的をもった行動の創造性は先行する事象の使用を含んでいると主張する。しかし、行為の進行構造の中で解釈されるときのみだが——。また、G・H・ミードから示唆をえて、自己-概念あるいは後におこる行動に対する先行の原因として社会的相互作用状況を利用しようとする人々もいる。ミード自身、この問題に関してうまくはぐらかしている。ある点で、彼の分析は行為の絶え間なき再構成の過程に対して、非決定論を示唆している。またある点では、社会的決定論が主要なテーマであるようにも思える。これは、必ずしも大きな矛盾ではない。もし我々が決定論を相対的なことからだと考えるならば（たとえば、フロイトが喜んで受け入れるような、非常に緊密に結びつけられた因果力ではなく）、我々は、後続の行動と最も関係していると思えるような先行する事象のタイプを認めることができる（それは、この行動を形成する内的な過程も含んでいる）。これらは、進行する行為を組織化する解釈過程とは別の効果をもたらすことを必ずしも意味せずに、適当に原因と呼ばれているのかもしれない。

シンボリック・インタラクショニストが、観察可能なキイ概念として何をみているか、また彼らは社会的因果をどのように考えているか、といったことを明確にすることが困難なために、社会心理学界でシンボリック・インタラクショニズムに及びせられる最も一般的な批判——つまり、彼らの理論は、実証できない——が気になるのである。しかし、そういった批判をのべることは、おそらく問題を回避することになる。では、シンボリック・インタラクショニストの理論は、検証可能な仮説を構築できるのか。

ジョージ・H・ミードが、社会心理学に与えたものは、科学理論に関するよりも一般的な哲学的アプローチに関する方がより大きい。さらに、進行する相互作用を強調したことは、たえ

ず変化するものの中で科学理論をうちたてるための材料を残したことになる。我々が検証可能な仮説をうちたてるのに使える——経験的に測定可能な——明確な現象はどこにあるのか。シンボリック・インタラクショニズムは、そういった経験的な仮説をもたないと仮定すべきでない。たとえば次のようなものは、自我理論の領域で経験的に検証され（かつ支持され）た仮説として挙げることができる。

(1) 人々が社会的地位をより長く占めれば占めるほど、自己一定義はそういった地位によってより大きく影響される（Kuhn, 1960）

(2) 自己一概念は、現実の判断よりも、知覚された他者の判断により密接に符号する（Miyamoto & Dornbusch 1956, Quarantelli & Cooper 1966）

(3) 評価の基礎となる他者がえられないときには、個人は、他者から、とくに判断能力がよりすぐれていると知覚している他者や、一般的な社会的地位がかなり高い他者から受ける評価に従って自分から行動を期待するようになるだろう。（Webster & Sobieszek, 1974）

(4) 自己一概念の安定性は、意味ある他者に高い同意を伴う方が、そういった同意が低いときよりより大きい（Backman, Secord and Peirce 1963）

こういった仮説は、シンボリック・インタラクショニスト理論の基本的な予言を投影しているように思える。しかし、それらはまた、たいして奇抜なものではない。我々は実際にこれらの予言のいくつかの逆を想像することができるだろうか。そしてもし、我々がその反対のパターンが本当であることを明らかにすれば、これはまた、シンボリック・インタラクシオンのパースペクティブとはなりえないのだろうか。たとえば、短時間の社会的地位は、長期間のものより大きな影響をもつことが明らかだと仮定しよう。そのとき我々は、最近の地位がより目立っている、それゆえ、自己一意識行為の形成に意識的により引き込まれがちである——と考えることはできないのだろうか。

これらの考察から導かれるであろう結論は、ジョージ・H・ミードとシンボリック・インタラクシオンの中心的な仮説は、経験的な検証には適用できないということだ。たとえば、シンボリック・コミュニケーションは、本質的に、社会的相互作用の産物かどうかを実際どのように検証できるのか。それは知覚できるかもしれないが、それは言語能力の生まれつきの基礎がそうしているのである——では、我々は、遺伝的な仕組みから、社会的なものをいかに区別できるのか。あるいは、自己一概念が、言語的合図によって必然的に伝達されるのかを実際にどうすれば検証できるのか。これは、もっともな言い訳ではある。しかし我々は、それをいかに証明するのか。おそらくできないだろう。シンボリック・インタラクショニズムの全体的な検証のみが、社会的行動について経験的に適切な理念を組織化するとき、プラグマティックな有用性をもつであろう。そして、強力な社会学的基礎をもつ社会心理学者の間では、ジョージ・H・ミードの遺産は、とくにこのプラグマティックな意味において、価値をもたれているようである。

高松短期大学研究紀要

第 12 号

昭和 57 年 3 月 1 日 印刷  
昭和 57 年 3 月 10 日 発行

編集発行

高松短期大学  
〒761-01 高松市春日町960  
TEL (0878) 41-3255

印刷

高東印刷株式会社  
高松市東山崎町596番地